



緑爽会報 NO.124
 '14年 1月28日
 発行
 公益社団法人
 日本山岳会 緑爽会
 ☎ 03-3261-4433
 事務局 松本恒廣
 夏原寿一 近藤雅幸
 近藤 緑 川口章子
 渡部温子 福原叶子

寒中お見舞い申し上げます

今年の寒さは格別と思うのは、年のせいでしょうか。それでも1月21日(火)の正月山行は晴天に恵まれて、盛況のうちに終りました。昨年10月のシンポジウムの記録もようやく完成間近。12月10日の忘年会の折の講演記録を先に掲載します。当日は、新入会の川嶋新太郎氏による鳥海山の写真を鑑賞後、遠来の佐藤淳志氏のお話に移りました。



撮影 小泉義彦



わが山、鳥海山 撮影 川嶋新太郎

緑総会12月例会

「鳥海山のイヌワシと共に生きて」

山形支部 佐藤 淳志

日本山岳会自然保護委員会と

「鳥海山南麓生息イヌワシ」について

緑総会に入れて頂きいつかは足を運びたいと思っていたのですが、会報が来るのが楽しみでした。今日こうして、お逢いでき念願がはたせました。松本さんに忘年会に出席すると伝えると、何か話をしてほしいと言われ資料をそろえて来ました。

私がどうしてイヌワシかと言いますと1990年、三島市で開かれた日本山岳会の自然保護全国集会で、当時会長が山田二郎、自然保護担当理事が松本恒廣、委員長が澤井政信さんたちでした。その時に初めて私が「今、鳥海山に大規模スキー場建設計画が持ち上がっている。緊急動議として検討してほしい」と発言したのが始まりです。

当時の状況は、スキー場建設は最初の建設予定会社が降り、地元の人幡町が森林利用総合計画の一つとして「コクドKK」を誘致して造ろうとコクドにお願いに行っていました。自然保護委員会は全国集会での報告を受け委員会として取り組み、現地調査を行い要望書を1991年2月に八幡町町長、写しを山形県知事、国土開発KKその他関係者に出した。この頃は建設反対署名運動だけで、山中の野生生物の生態については全く論じていなかった。

1993年になってイヌワシがいるらしいぞと言う話が出始め、1993年片品村で開催された、自然保護全国集会で(会長・藤平



佐藤淳志さん 撮影 小泉義彦

正夫) 日本山岳会自然保護委員会として鳥海山の山岳調査の一端としてやろうとチームを作り「日本山岳会自然保護鳥海山イヌワシ調査会」を作り、1997年調査をまとめた「鳥海山南麓イヌワシ調査報告書」を日本山岳会自然保護委員が作成し小、中各学校、図書館等に配布した。

追従して山形県の報告書、2000年、2002年に「鳥海山ワシタカ研究会」が作成して仙台をベースに野球の楽天ゴールドイグルスが始まった頃に「イヌワシの四季」など5冊の本が出版され、そのうちの3冊に自然保護委員会が関わっている。

私が1993年に鳥海山にイヌワシがいると話を出して調査をしようとなったが、引き受けるにもイヌワシのことを全く知らない。考えた末にトビのいる所に一カ月通い飛翔、形態、行動を観察しトビ以外の大きい鳥はイヌワシだろうと一年間、四季を通して調査を始めた。調査の記録は2万5000の地図に、50メートルのメッシュを切りトレースを重ね同じ場所を通過したのを一年間カウントしてデーターを取った。そのデーターを日本イヌワシ研究会の第一人者に見てもらった。先生は月別に繁殖期、非繁殖期、重要な行動域

「緑爽会2月例会のお知らせ」

日時 2月27日(木) 13時30分

場所 JAC集会室

◆対談「お茶の水ルーム時代の思い出」

山口節子 山本良子

まだ一般の女性が山に行くのが珍しかった時代、先駆けて日本山岳会に入会して本格的な登山をしたお二人から、思い出を語って頂きます。係 ☎ F03-3326-2892 松本



スケッチ 中村好至恵

佐藤 淳 氏
2013.12.10

と分析して下さったがその後、反対運動の為の調査にはお手伝いできないと言われた。再考して、学術的な数値が出るまでライフワークとして調査をする旨を伝えると理解していただき、最後まで指導していただいた。調査した資料で飛翔しているらしいことが伝わり、調査業者や八幡町も独自に調査をした。その結果鳥海山南麓のスキー場の計画地域は飛翔しないと言ったことになり大激論をした。日本山岳会のデーターは信用してもらえず山形県知事は、スキー場開発を認可した。

当時、白神山地、朝日スーパー林道、鬼怒川林道の話も出てきて、ようやく希少動物が開発の歯止めになる機運が出てきた。観光開発や産業開発の予定地から3キロ以内に営巣地があれば止め、3キロ以外だと開発をするという全国的な暗黙の了解があった。

そこで、私たちは飛翔データーを取り営巣地探索に取り組み124日目、1995年4月24日に巣にたどりついたのが認可が下りた5日後だった。

巣は工事予定地から1・3キロにあり、この事態を急遽日本山岳会に伝え緊急記者会見を酒田市役所で「イヌワシの巣が見つかった」

と発表したが、最終的には山形県で独自に調査することになり「山形県鳥海山イヌワシ調査委員会」が発足し学者、有識者6名に私も加わり1年半調査を続け、1997年関係者が集まって自然の生態系は保全されるべきで猛禽類の繁殖するのに適している場所であれば開発するべきではないだろうと言うことで決着がついた。

その後環境省はいち早く日本初の猛禽類保護センターを設立し、立派なセンターが八幡町に開設された。「イヌワシ」の生態系から学ぶこと

ここで、重要なことは開発が中止になった場合その後、どのような生態でどのように環境が保たれているのかが意外と調査されていない。イヌワシの全国的な調査は余り進んでいないので確実な数が把握されていないのが現状です。その一方でイヌワシは絶滅危惧種、天然記念物指定種、国内希少野生動植物種、食物連鎖の頂点だと言われている。全国的な生態の調査を進め、イヌワシの数を把握する必要があります。

イヌワシは険しい山地に生息し、行動範囲が広く、生息に必要な環境が確保されていると言うことは食物連鎖が保たれていることの証で今後生態系の調査は重要です。

繁殖している「つがい」の

一年の生活サイクル

10月からはラブラブロールの求愛時期です。イヌワシは、一方が「落鳥」と言つて事故か老衰又は病死かで死なない限りは永久にペアを組み、ペアの営巣地の近くで求愛行動を12月一杯する。たまには、枝を巣の補修のために運んだりしている。巣も2、3カ所持つと言われているが鳥海山は場所が厳

しいの今このところは一カ所だけのようだ。

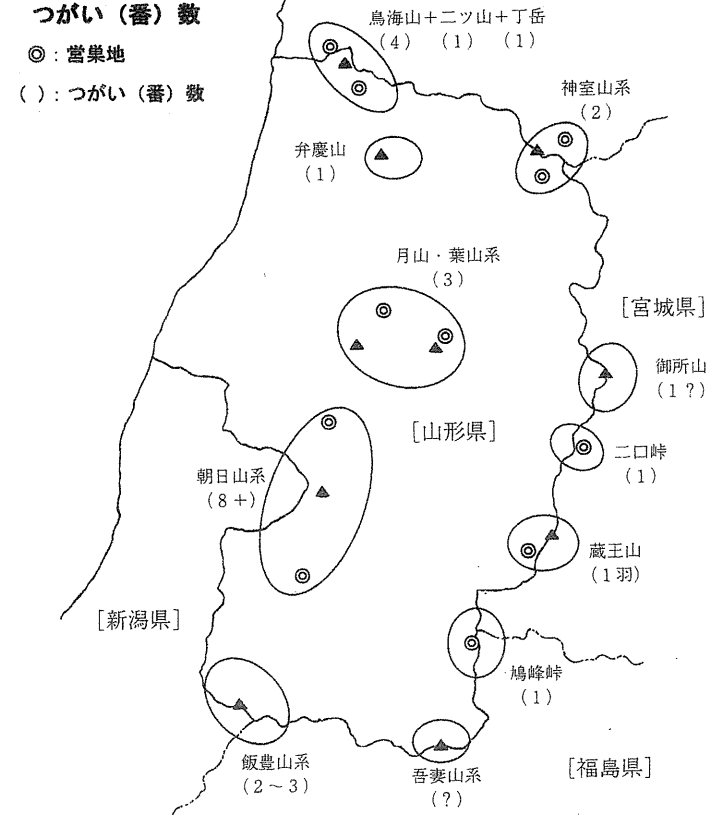
上から払い落としたり枝をもう一羽がキャッチして巣に運ぶなど、この時期の求愛期行動を見ているのは楽しい。

次は産卵の時期が地域で違うと言われるが全国的データーをみるとそんなに時期はずれないように思う。鳥海山南麓のイヌワシの産卵は一月二十八日から二月五日頃までとみている。産卵した卵は主に雌が温める。両開翼2メートルもある大きさと飛び回り体力を消耗することもあり食べる量も多い。抱卵期は雄は雌の餌確保や、テリトリーのパトロールなど活動が活発になる。

抱卵しているかいないかは雌の出現頻度や外敵への攻撃（モビング）でわかる。巣の場所が多雪急峻地帯で見ることが出来ないうために動態で察知するが、抱卵してから大体四十五日間でひなに孵る。

卵は通常二個産むと言われている、一度に二個産むのではなく最初一個、二、三日置いて二個目を産みどち早く孵った方が優先され兄弟殺しと言われる行動をとる。一羽が

山形県内のイヌワシの生息地域



巣立つまで大体八十日かかる。その間幼鳥は巢内でジャンピングを繰り返して、風をとらえて風に向かい何度もジャンプして、巣立ちの練習をする。巣から飛び立った時を巣立ちと言う。巣立ちした幼鳥は一切巣には帰ってこない。周辺に降り親からの餌を待つ。幼鳥の一番危険な時期は巣立ちしてからの一カ月です。周辺には天敵が多いので親が護り餌を

与える。この時期が過ぎるまでの生存率は鳥海では50パーセントぐらいで全国的にはもっともつと低くなる。

巣立ちしたイヌワシはすぐに飛ぶことはできないので親鳥が上昇気流のとらえ方を教える。上層気流をつかんで垂直約1000メートル上がり、次は並行に移動し、再び上層気流をとらえて上がり、鳥海山の上を飛ぶ。下

降の時は羽ばたきもせず一直線に下る。獲物を捕る時は時速100キロ以上のスピードをだし、コントロール自在の鳥です。自由に飛べるようになるのとえさの捕り方を教えるが時々親がえさを上から落とすとして空中でキャッチングする訓練も何回かする。又巢内では大きな木の棒を置いて爪を研ぐ訓練も見ることが出来る。飛翔、狩りの模擬をして9月の半まで続く。鳥海山のイヌワシのメインディスプレイは野ウサギが多いが、餌となるウサギは群れからはぐれたり必ずしもいい健康状態でないものが多く数は減らない。

秋になると繁殖のために幼鳥を独立させようとテリトリーから幼鳥に体当たりするようイヌワシが行動をして追い出しをしようと、幼鳥は悲しい声でキャンキャンと鳴く。鳥海山でも見られたが、たまに追い出されても親から離れない幼鳥がいて翌年、幼鳥と亜成鳥の二羽いたことがあったが、それは環境、植生などの条件がいいということもあります。また、2001年にカザフスタンで調査した時に聞いたのは三個卵をうみ、三羽育ったと言う。餌が豊富にある環境で、日本の場合は完全に餌不足です。

生物多様性とイヌワシの森づくり

イヌワシは北半球に生息し、亜種で五種か四種と言っていますが一種は朝鮮半島と日本は同じ亜種、アメリカとカナダ、ヨーロッパと中央アジアに分かれる。一番小さいのが日本と韓国、カザフ、モンゴルは大草原地帯を大きく羽ばたける。現地では測って見たら2メートル30センチありました。日本の森林生態系を考えるとそのサイズになるのかなとある学者は言っています。

イヌワシを頂点にしたアンブレラー式では

イヌワシがいると言う事は生態系や生息環境がある証で学校の研修会でも生徒に話すときは「皆さんが住んでいる所にイヌワシが棲んでいると言う事はそれだけの自然がまだ残っているんだよ。大事にしなれば」と言っています。

最後に言いたいのは「調査不足」を言い続けた。即結果が出なくても山岳地帯の調査を働きかける必要あるのではないか。イヌワシの採餌・環境を整えるべく「列状間伐」によるイヌワシの森づくりをしています。森林を本来の生物多様性に富む姿に戻す作業で、イヌワシが決してゲージの中の保護鳥にならない事を祈りながら毎月4日間の調査を仲間を誘って「生涯のフィールドワーク」として継続しています。(まとめ・川口 章子)

【出席者】山本良子・田村佐喜子・五十嶋一晃
梨羽時春・松本恒廣・佐藤淳志・菅野弘章・近藤緑・関塚貞亨・吉田理一・堀井昌子・川嶋新太郎・鈴木快信・奥野道治・鳥橋祥子・樋口公臣・中澤喜久郎・島田稔・福原サチ子・富澤克禮・夏原寿一・瀬戸英隆・田井具世・川口章子・小泉義彦・西谷隆巨・西谷可江・中村好至恵・三枝海枝・荒井正人
計30名



年頭に想うこと

— 藤原老人独白 —

奥野 道治 (長老)

12月例会で山形支部の佐藤淳志氏の「鳥海山のイヌワシと共に生きて」の講演を聴講し、いたく感動した。そこで想起されたのは、その運動の端緒にもなったJAC自然保護委員会の活動であった。当時の理事であった松本恒廣さんが先頭に立って、観光開発によって鳥海山周辺のイヌワシの生存が脅かされることを危惧し、関係官庁へも強力に働きかけられた活動ぶりであり、当時のことが懐かしく思い出された。

富士山が念願叶って愈々世界文化遺産に登録されたが、この山には思い出が多い。

中学、高校とスキーの選手だったので、大学は文句なしにスキー山岳部に入部し、最初の合宿が富士七合目付近でのアイゼン、ピッケルを使った氷雪トレーニングで、指導は後の南極越冬隊長の村山雅美先輩が受持ち、大分しごかれた記憶がある。

社会人になって程なく、各大学山岳部の合宿が吉田大沢付近で晩秋に行われた際に、雪崩による大遭難が起きた。ニュースを知った各大学のOBによつて救援隊が組織され、その一人として参加したが、遭難者の多くは雪崩に埋没したままだった。ピッケルでは短く、2〜3mの鉄棒を使用し、猟犬も使ったが効果少なく、結局最後の遺体発見は、翌春の雪解けを待つより他なかった。東大5名、慶応2名、日大8名計15名の若い命が奪われるという大惨事だった。

雪崩では、科学委員会の庶務を一手に引き受けて頂いていた女性会員が、勤務先の停年

を期に、念願のエベレスト登攀に向い、六合目のベースキャンプで、多雪崩がテントを襲い、尊い命が奪われるという惨事になった。後日、丸の内の東京会館で懇話会があり、司会は委員長森武昭氏(現JAC会長)が努めた。

若い時乗鞍のスキー合宿に参加し、頂上付近の滑降で、スキーは滑らずに身体だけが移動し、妙な感覚を味わったが、実は表層雪崩の上に乗っていたわけで、幸い小規模で大事に至らず、この年まで生き永らえている。

文化遺産登録と共に富士詣でが激増しているようだが、ゴミやトイレ対策はどうなっているのか気になるところだ。科学委員会では既に大分以前に、登山者の護るべきマナーノート(糞尿処理)の発行など啓蒙に力を入れてきたが、地元両県は入山料もさることながら、増大するゴミと排泄物にどう対処するのだろうか?

専門家の説によると、汚染された地下水は何十年もの長いスパンで、悪影響が出ると。愚生は、飲料水はボトルの自然水を愛用しているが、富士山系だけは買う気がしない、水源が気になる。

水で思い出したのは、原宿在住時代に、JACの田口二郎さん、渡辺平力さん、松丸秀夫さん等をお呼びしてよく山の懇談会を催したが、ある時大手水産会社売出した南極の氷片を、おもてなしにウイスキーと出した処、村山雅美さんが「この水には俺達の小便が入っているだよなあ」と発言、そこで小生がすかさず、「それを言ったらおしまいよう」で一同爆笑。

亡くなられた諸先輩とは、緑爽会の活動ぶりなどを手土産に、いずれ天国での再会を楽しみにしている。

(完)

高橋健治&ローゼ・レンサ

一詩・結婚によせてー

モア・ジョイ会 山崎 宗城

10月25日のシンポジウムの3人のパネリストによるプレゼンテーションが終わって後、司会者から聴講者の一人であった私をモア・ジョイ会の会長として皆さんに紹介してくれました。併せてローゼさんについて何かコメントを私に求められました。

そこで私は、ローゼさんが私にくれた彼女の著書の中から当日持参した DAS HOHE LIED (雅歌) の詩の中から Hochzeit (結婚) の詩を読み上げて、その場で日本語に訳して紹介しました。

この本は1985年にローゼさんが自費出版した本で、その年のモア・ジョイ会のクリスマスに彼女の一言を添えて私にくださったものです。思うにローゼさんの77歳の時の著作です。

『雅歌』は、ローゼさんの人生の中で、一番みずみずしかった時代の歌を集めたもので、夫となった高橋健治との出会いから、愛を育んだ時代の歌、結婚を前にしての喜びと不安を謳った詩、そして当日紹介した「結婚」の詩、やがて健治さんが亡くなる直前の二人だけで過ごした夜の詩、別れ、健治が彼女に残した「山」への思い、「私たちの那美(エリザベス)」等、ローゼさんの若き日の喜びと悲しみの時代の詩歌を集めた珠玉の詩集です。

ローゼさんは、私のようなモア・ジョイ会の若者が訪ねたりする時は、いつも気丈でそしてやさしかったのですが、皆が帰った後の時間や夜はまた一人の静寂の中にあつて、自



生麦・順光学園時代のローゼさん

Hochzeit

“Geliebte, sag, wann soll die Hochzeit sein?”

“Wenn alle Vöglein jubelnd singen,
wenn all die vielen Blümelein
just aus den Knospen springen,
dann, Liebster, soll die Hochzeit sein!”

“Geliebte, sag, wo soll die Hochzeit sein?”

“Auf grünem Moose weich und fein,
im tiefverschwiegnen Waldeshain,
und - Liebster - hör: im Sonnenschein,
da, da soll die Hochzeit sein!”

分の過ぎ去った日々を思うことが多かったと思います。

ローゼさんは自分の経験してきた日々を描いた JAPAN DIE FREMDE-JAPAN DIE HEIMAT 『異国の日本・私の日本』 Und dann... (それから...) に自叙伝としての人生を著しておりませんが、ローゼさんは人生の中で一番美しくも悲しかった時代だけを取り上げてまた1冊の本にしたかったのでしよう。

結婚

“愛する人よ、言ってください、結婚式はいくですか?”

“小鳥たちが歓びで歌うとき

たくさんの花がその蕾から咲きだすとき
そう、愛する人よ、結婚式はその時です”

“愛する人よ、言ってください、結婚式はどのですか?”

柔らかな緑の湿原

そこは深く静かな森の中、

そして、愛する人よ、聴いて下さい、輝く光の中

そう、結婚式はそこでなければなりません”

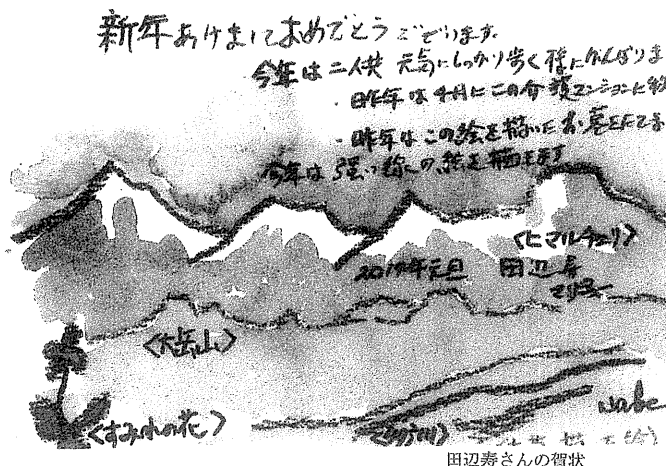
ローゼさんのくださったこの本には、また「私たちの那美(エリザベス)へ。」

過去は現在の時間を超えて未来を照らす

1945年6月29日
と書き込みがあります。

後記にかえて

★今年の冬は勝沼山中の限界集落で過ごした。あまりの寒さに冬眠状態で、失礼の向きが多かったことをお詫びします。★シンポジウムの記録だけは何とか纏めたいと、頑張ってみましたが、果たして期待に応えられる纏めになったかどうか気になります。作業の間、援けてくださった方々にお礼申し上げます。★賀状の中に田辺壽大先輩のスケッチがありました。ヒマルチュリを背景に奥多摩の山々、そして多摩川を描いたものです。読むと、こ



田辺寿さんの賀状

の絵を描いたお墓を建立したとか。その人の生涯を端的に表したこんな墓碑は素敵ではないか、まだまだ現実感がありません。今年もお達者で。★必要があつて石原八束著『駱駝の瘤にまたがって』を読みました。詩人三好達治の評伝です。二・二六の首謀者たちと同じ時期の陸軍士官学校を脱走退学した後、三高に入り、桑原武夫と同期とか。「旅のはりるの鶴とり」の詩人が、もし脱走しなかったら反乱軍で処刑されていたかも。また三高は、フランス語で受験したのだから。岸田国士(第一次大戦後に退役)、新庄嘉章(幼年学校退校)ら日本のフランス文学者が旧陸軍の語学教育から生まれたことがわかって面白かった。三好達治は東大、桑原武夫は京大に進むわけだが、親交は厚かったらしい。三好達治が当時の三高山岳部をどう見ていたのか。チヨゴリザの桑原隊長の一面を知って興味が湧きました。勉強はまだこれからです。(近藤)